

マガジン創刊 10周年記念企画

「対人援助学マガジン 執筆者と読者の会」



年末に行われた「対人援助学マガジン 執筆者と読者の会」
どのような会であったのか、参加者の声をお届けします。

①執筆者・読者の集いに寄せて（岡崎正明）

年の瀬迫る 2019 年 12 月 28 日の午後。

私は床の間と仏壇のある、いかにも「昭和のお茶の間」といった風情の居間にいた。達筆な字が書かれた掛け軸。大黒様の置物。古い家族写真。そのどれも懐かしい。石油ファンヒーターが全力で稼働しているおかげで室内は暖かいが、障子一枚隔てた廊下は吐く息も白いほど冷え切っている。その廊下の窓越しに見える外には、畑と山と、古い家屋・蔵がいくつかあるだけで、コンビニもビルもない。そして目を室内にむけると、私の前には 70~30 代くらいの男女が複数。2 つ並んだ 4 人掛けのコタツにそれぞれ足を入れ、買ってきたお土産を食べながらお茶をすすっていた…。

ここまで読んで、私の年越しの帰省話と思った人がいてもおかしくない。しかし何を隠そう、これが対人援助マガジン 10 周年記念の執筆者・読者の集い（1泊2日）のまぎれもない 1 コマである。数時間前、人で溢れかえる京都駅で新幹線を降りたとき、こんな景色の中に自分が飛び込むことになるとは、誰が予測できただろう。

集まったのはもちろん親戚ではない。集いし者の共通点は①なんらかの人の援助に関わっている②マガジンで連載しているという、その 2 点だけ。あとは出身地も仕事も、抱えるバックグラウンドもバラバラ。そんな個性豊かな面々が、降り立った初めての土地。なのにまるで里帰りした雰囲気この部屋で、こうしてコタツを囲んでいる不思議。さすが人や家族の支援を考える学会だ(笑)

そんなわけでどうしてもタイミングとロケーションが里帰りで集まった親族一同にしか思えなかったため、「マガジン一族」という設定で参加者を勝手にご紹介させてもらおう（あくまで個人の親愛の情からくる悪ふざけであり、根拠も悪意もございませんので、笑って受け流してください）。



まずは団編集長。一番にこの場に馴染んでいた存在感は、まさに皆の帰りを待ち受けていた一族の長。饒舌に家族や社会を語る姿は、一族の中心ここにあり！であった(笑)

次に河岸先生。本当に北海道から来たの？と思うほど現地に詳しく、その包容力も相まって、まるで故郷で子どもらを温かく迎え入れる母のように思え(笑)

そのそばでニコニコしながら、相手の話をしっかりと受け止めてくれる坂口さんは、優しい叔母のようなたたずまい。

編集担当の千葉さん・大谷さんのお2人は、今回の企画や宿の手配などこまごまと動いてくださり、その実直かつ気配りの精神は、実家を継いだ優しい長男と、その兄から頼りにされる賢い次男坊という印象。

対して落ち着いた雰囲気の中にも、キラリと光る面白さをみせる杉江さんは、都会に出て活躍する従弟くんといった風貌で。

最後に真打のごとく登場した中村先生の話は、刺激と知恵と独創性に満ちていて。どこ一族にも1人はいて欲しい、知恵袋で芸術家肌で、ちょっと変わり者の？伯父さんのようだった(笑)

そして忘れちゃいけない。初対面でも堂々と、かつ気持ちよさそうにコタツで眠っていた小池さんは、当然みんなから猫扱いされていました(笑)

そんな多士済々と1泊2日。大いに語り、大いに笑った。ただ楽しいだけでなく、ただ勉強になるだけでなく。仕事への哲学や、社会へのアプローチの仕方、家族との歩み方など、多様なようでどこか通底するところのある話の数々。業務の研修や、現場での実践で得られるものとはまた違った質の学び。もっと自由でいいんだ！この枠だけにおさまる必要なんてないんだ！と気づかされることばかりで、目からウロコが落ちまくりだった。

ここまで読んでちょっと興味を持った方は、ぜひぜひ合宿参加者の連載を読んでみることをオススメする。畑違いと思っていた実践に、意外とあなたの人生を揺さぶるようなヒントが隠されているかも。

最後に築250年という宿の前で記念撮影をして無事解散。「また10年後に～」なんて話もあったが、10年とはいわず、オリンピックペースくらいでやってもいいのでは？と個人的には思う。まあこればかりは編集部の長男・次男さんが考えてくださることを期待しつつ…。

②マガジン創刊 10 周年記念 執筆者・読者の集いに寄せて（杉江 太朗）

短信でも触れたが、年末にマキノに泊まった。おそらく、マキノと聞いて、なぜカタカナなのかと思った方もいるかもしれないが、正式名称が滋賀県高島市マキノ町なのである。そして、これは、1 人で行ったわけではない。家族で行ったわけでもない。なんと、対人援助学マガジンの執筆者の方々と泊まったのである。

始めて出会う方もいた。名前だけは知っている方もいた。お互いの家族同士が知り合いだが、私たちはお互いに知らないという方もいた。大学院のときにお世話になった先生もいた。大学院の先輩もいた。研修でお世話になった方もいた。それぞれの方に共通するのは、対人援助学を生業とし、対人援助学マガジンに連載をしているということである。そんなメンバーで集まるという機会に巡り合えたことに感謝である。

当日は、集合時間に集まり、とりあえず、お茶とお菓子を頂きながら語る。そして、博物館を兼ねる宿泊場所を見学する。その後ご飯を食べ、近くの入浴施設に行き、そしてまた語る。みんなで川の字になって寝て、そして翌日、朝ご飯を食べて、解散。

そこで語られる話は、型にはまった話ではなく、それぞれの領域で、対人援助に誠実に向き合ったからこそ語られるものであった。その語りを聞きながら、心の中では、自分の過去を振り返った。そして、自分の心の中にある、信念のようなものを再認識した。

対人援助において、人との繋がりは必要である。繋がるためには、余地（余白部分）がある方が良い。余地がない状態で繋がっても脆さが残るだけである。そうした対人援助の余地は、目には見えないものであるが、まずは、自分以外の人に興味を持つことから生まれるのではないかと思う。そうした意味で、参加者の方の話は本当に面白かった。

岡崎さんいわく、私は従弟らしい。そうか。従弟か。ジェノグラムが書けそうだ。またこのような余地を感じられる時間が欲しいものである。しかし、余地だけではいけないことも重々承知している。余地（余白）だけだと白紙である。それではいけない。日常の援助に信念を持ち、連続性を確保しながら携わっていこう。余地を効果的に活かすために。



③合宿に参加して（坂口伊都）

12月28日から一泊というスケジュールで対人援助学マガジン10周年創刊記念の合宿が開催され、9名が参加しました。この年の瀬に滋賀にある、茅葺屋根の博物館でご飯をいただき、昭和にタイムスリップしたような感覚になる母屋にお泊りでした。母屋には炬燵が2つ並び、田舎のおばあちゃんの家という佇まい。それでなくても緩い集まりなのに、ますますのほほん気分になって、皆で正月休みにおばあちゃんの家へ帰省した気分を堪能しました。年末にお正月を済ませてしまったような感覚です。

その中で面白かったのは、やはり「生き方論」でした。いろいろな立場、年齢の人が集まって、どの人も現状維持を望む人が見当たらず、常にどう生きていこうか向き合おうとしている人ばかり。酸いも甘いも噛み分けている諸先輩方の背中を見て、自ら変革しようと後輩が続く。先輩が自分たちに恩を返すな、恩恵は後輩に渡していけという姿勢が前に前に進める力になっているように感じます。着目点の違いに驚き、そんな発想もあるのかと納得し、私も何かを見つけたいと刺激され、一人ではできないことだと改めて感じました。

次の合宿は、いつかなあ。編集者の皆さま、いつもありがとうございます。次回があること期待しています。その時はもちろん、お手伝いしますよ。



④「対人援助学マガジン 執筆者と読者の集い」記録係からの報告（大谷多加志）

昨年末に開催された「対人援助学マガジン執筆者と読者の集い」。とても面白く、刺激的な時間であったと言うほかないのですが、そのエッセンスを少しでもお伝えできればと、一応の記録係を承っていた立場からまとめてみることにしました。ただ、話を聞くのに夢中で記録は途切れまくってしまいましたので、断片的な記録と記憶を、記録者なりの理解と解釈でつなぎ合わせたものであることをご承知おきください。

マガジンが成り立つ背景

今回の企画はマガジン 40 号発行を機に企画されました。年間 4 号の発行ですので、10 年間継続されたこととなります。Web 発行のフリーマガジンが 10 年間継続された背景が、執筆者の集いでも話題に挙がりました。

長年続いた雑誌の廃刊も珍しくない時代です。情報が売れなくなったという現在、マガジンはどのような仕組みで継続してきたのでしょうか。ご存知ない方がおられるかもしれないので一応説明しますと、現在の執筆者は 50 名超ですが、執筆者に対する「原稿料」は発生していません。つまり、執筆者は無償で原稿を書いています。執筆するためには対人援助学会の会員になる必要がありますので、何ならお金を払いながら連載を続けているのです。

また、マガジンの掲載は対人援助学会の Web ページ内ですので、発行にかかる費用は基本的にはゼロです（厳密にはサーバーの維持管理費などはあるはずですが、新規発行に伴う支出は極小です）。Web マガジンであるがゆえに、ページ数の増減にも特に支障がありません。過去に 40 ページ超の原稿が連載の 1 回分として掲載されたことがありましたが、編集部として驚きはしても問題にはなりません。このことには、社会インフラとしてインターネット環境が整備されたことの貢献が大きいと言えます。

通常、雑誌は販売売上や広告料に依存して発行が続けられています。そのため、売上げが落ちたり、広告が取り下げられたりすると、発行の継続が難しくなり、どれだけ内容が優れていたとしても、廃刊の憂き目に遭うこととなります。

対人援助学マガジンは、学会員以外でも閲覧フリーですので、販売売上はありません。また広告もありません。先に述べたように、原稿料さえありません。つまり、「お金」から解放された雑誌です。お金から解放されているがゆえに、売上や広告主の意向などの外的要因によって、発行や連載の継続が左右されることがないのです。すべて、執筆者の意思ひとつです。このことは、学会の定期刊行物としての対人援助学マガジンに大きな特色を生んでいます。

通常、さまざまな学会誌にはそれぞれの扱う学問領域があり、掲載される原稿や論文などは学会関係者の審査を経て掲載されます。つまり、執筆者側が掲載されたいと願うのであれば、その学会の“閉じた”流儀に執筆者が合わせていく必要があります。そのように

して学会の「権威」を醸成しているところもありますが、一方で多様性や発展性を犠牲にしているとも言えます。単純に、あまり面白くありません。執筆者が面白いと思っていることを書く。マガジンのもっとも根本的な魅力です。

このように書いてみると、読者の方にはひとつ疑問が生じるかもしれません。確かにマガジンはお金や権威から解放されていますが、逆に言えば執筆者の方にとっては金銭的なメリットもなければ、執筆していることが箔づけになったりもしません。なぜ書くのでしょうか？なぜ書き続けるのでしょうか？

マガジンに執筆する意味

編集員として関わってきた中で感じていますが、マガジンに執筆する動機は執筆者によってさまざまです。最初から書く回数や期間を設定して連載する方もおられますし、期限を定めず日々の活動を連載にし続ける方も、活動の変化とともに連載のテーマを変えながら執筆を続ける方もおられます。

今回の「執筆者と読者の集い」の参加者のうち、4名は創刊号から執筆しており、途中からの執筆は5名です。私自身は第10号から執筆＋編集を始めましたので、後者にあたります。後者について、多くの場合ひとつの共通点があります。もともと「読者」であったということです。逆説的に言えば、今マガジンを読んでもらっている皆さんは、執筆者の有力な候補と言えるかもしれません。

ある執筆者は、執筆するのは「余地」のためであると言います。対人援助の仕事は、「人」と関わる仕事であるがゆえ、状況や事情によっては援助者の都合はさておいて動かざるを得ない場面もあります。法律や制度によって動き方が規定されることもあります。援助職のバーンアウトはずっと以前から言われていることではありますが、“そんなこと、どこの職域でも同じだ”という理屈により、まともに扱われているようには見えません。任用されたばかりの新人や他の職域から異動でやってきた人が、専門職として現場に配属されているという現状もあります。そのような、ある種の閉塞感もある状況の中、仕事を続けていくために必要なものが「余地」です。そこには、いくつかの要素があるように思いました。援助者が今体験していることを、言語化し整理する「昇華」や「外在化」という側面。今だからこそ言える言葉で残しておく「記録」という側面。書くために資料を整えたり、調べものをするを通しての「学び」の側面。援助職の日常で言えば、それぞれ「カンファレンス」、「ケース記録」、「研修」にあたるかもしれません。援助職として仕事を続けていく上で、自分を擦り減らす一方にならないために必要な要素が、執筆活動の中に含まれているのかもしれません。

執筆者と読者

ブログであれば閲覧者数、SNSであればフォロワー数や「いいね！」の数から、当該の記事がどのくらいの人に読まれているのかがわかります。またコメント機能があれば、

読者からの感想や意見も容易に集められます。ただ、対人援助学マガジンにはその機能がありません。つまり、執筆者は自分が書いたものを誰が読んでいるのか、どのように感じているのかを知ることがほとんどありません。たまに、思いがけない機会に、初対面の方から『マガジン、読んでます！』と言われたりすることがありますが、基本的には稀なことです。

「いいね！」など、反響がわかりやすく可視化されることには利点もありますが、一方でそれが執筆者に対して有形無形の影響を与えることもあり得ます。もっとたくさんの反響があることを書こうとか、感想や意見も取り入れて「受け入れられる（ウケる）」ことを書こうとか思うのは、致し方ないことのように思います。しかし、団編集長は、これを「弱い」と言い切ります。その時々ブームに乗っててもはやされた（ウケた）ものが、ある日を境に、潮が引いたように見向きもされなくなるなど、世の中にはあふれています。そのような流れに応じて自分の行いを変えることは、『誰かの人生のネタになること』であり、それは弱さであり貧しさであると。

自分が書きたいものを書き続けること。それがマガジンという場を通して、誰かに届き、誰かに影響を与えています。それは執筆者には認識されません。しかし、それでよいのです。マガジンが持つ機能の一つが、アーカイブです。10年前の原稿が、今もバックナンバーとして閲覧できます。一つ原稿が、執筆された時点で持っていた意味と、今現在持つ意味とは、おそらく異なっているでしょう。そんな時間を越えた「意味」こそが重要であり、短期的な成果である「いいね！」や、即時的なリアクションに左右されては、そのような「時代の資料」になることはできないでしょう。10年前のファッション誌を取っておいったり、読み返してみようと思わないことと同様です。

誤解のないようにと思いますが、リアクションが不要だと言っているわけではありません。執筆者に会われたら、ぜひ「読者です」と言ってあげてください。一人にでも届いているとわかれば、結構な励みになります。

マガジンの新展開

最後に、10年を超えてこれからマガジンはどのように展開していくのか。話題にのぼったことは、まだまだアイデアの断片や芽とでもいうようなものですが、簡単にまとめてみようと思います。

この10年間で、社会も大きく変わりました。広告料はネット広告がテレビを上回りましたし、インターネットの閲覧もPCからスマホが主流になってきています。

スマホの利用においては、さまざまなサイトやアプリが、人々の「可処分時間」を奪い合う状況になってきていると言われていています。そんな中で一つの案として提示したのが、マガジンの音声メディア化です。

スマホ普及により押され気味のテレビ業界ですが、一方のラジオ業界は規模こそ小さいものの、依然として一定の視聴者を維持しています。この違いは、ラジオが音声メディアで

あることから生じています。つまり、耳だけ傾けていれば利用できる（ながら利用と言ったりします）ため、スマホと可処分時間を奪い合うことがないのです。相変わらずラジオは、車の運転中に聞いたり、料理や勉強をしながら聞いたり、「ながら利用」が継続されています。マガジンについても、音声化することで「ながら利用」を可能にしてみたら、どうなるでしょうか。新しい展開があるかもしれません。

また、これまで掲載してきた PDF ファイルの原稿は、視覚障害者の方が使う音声読み上げソフトに必ずしも対応していません。音声化することで、アクセシビリティをより高めることにもつながるかもしれません。「Voice of Magazine」構想（中村先生の命名です）、できれば早期に、利用しやすい形で実現できればと考えています。

他にも、執筆者×執筆者の企画（これは、往復書簡型連載などで一部試みしていますが）、執筆者×読者という展開、執筆者別の連載ベスト5 など、さまざまなアイデアが活発に交わされました。いつの日か、皆さんにお披露目されるかもしれません。

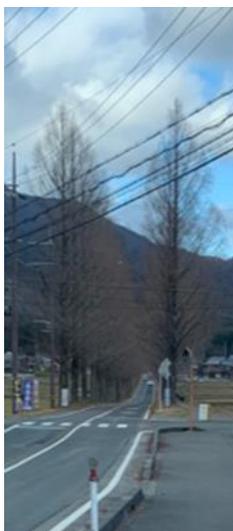
以上、多分に個人的な理解や見解も含んでしまっていますが、「記録係から見た執筆者と読者の集い」の一部を報告できたと思います。いつの日か、再び集いの機会があった時は、ぜひ参加を検討してみてください。



⑤ 「対人援助学マガジン 10 周年執筆者の会に参加して」(河岸由里子)

年の瀬、大掃除も料理もうっちゃって、のんびり滋賀県北部の高島市に出かけた。前日に北海道から京都入り。翌日京都から湖西線にのって 1 時間ちょっと。マキノという無人駅で降りる。初めて来た土地。バス停に行ってみるが誰もいないしバスもない。駅に戻って、観光案内所でお茶を飲んでいたおばちゃんに声を掛け、バスの時刻表を貰い、説明を受ける。白谷という場所まで行けばすぐわかるとのこと。ならばとバスに乗って白谷を目指す。途中メタセコイア並木を通り、一本道をひたすら進む。スキー場を目指してと言われたが、こんなところにスキー場があるのか？冬の今、山々に雪は見当たらない。(今年が珍しいということを知った。)

バスに揺れること 15 分。目指すバス停に。見ると「茅葺の里」との小さな看板が一つ。但し矢印の類はついていないので、勘で進む。緩やかな上り坂を登っていくと、二股に道が分かれてしまった。さてどっちに行ったものか？マップで確認しようと道端でスマホをいじっていると、下からジープタイプの車がきて、おじさんが声を掛けてくれた。「茅葺の里に行くんでしょう？この先ですから。」と二股の片方の道を上って行った。その後を追って上っていくとすぐに茅葺の大きな民家が見えてきた。



梅と鶯が似合いそうな古民家。先ほどのおじさんが、古民家の隣の家に案内し「こっちで休んでいてください。」という。その家は昭和の香りがプンプンする二階建ての家。広い土間の玄関から上がると、底冷えがする。昔の家はこんなものだ。家に上がって、さてどこにいればよいのかと居間の様な所にいたが寒いので、家の中を探検。直ぐ奥の襖を開けてみた。すると炬燵が二つと灯油ヒーターが一つ。勝手にスイッチを入れさせてもらい、炬燵に入って待っていると車の音や人の声が聞こえる。誰か到着したようだ。と玄関の方に出ていくと、千葉さんたちの姿が。家の中から手を振る。まるで自分の家に招いているかのように。ちなみに玄関開けっ放し。

ここからは、到着したみんなで炬燵二つに入り込み、お菓子をつまみながら参加者の紹介やら対人援助マガジン関連のお話やらあれこれしゃべる。家族親族の集まりのような気安さで、対マガ団家のおしゃべりは尽きない。茅葺の古民家に泊まるのかと思っていたが、泊まるのはこの昭和な家で、食事だけ古民家との事。有形文化財・築 250 年もの家でご飯を食べること自体経験のないことだ。夕飯の時刻になってみんなで移動。ここで遅れて到着された中村先生も合流。そしてまたしゃべる、食べる、飲む、笑う。何と健康的なことか！話題は色々。職場の話、家族の話、社会の話、新しい企画の

話等々。夕飯後若い皆さんは近くの温泉へ。高齢者の二人は炬燵で団先生のスマートウォッチの操作に頭を悩ませる。みんなが帰ってきてからは炬燵に収まり、おしゃべり再開。タイムスリップしたような時間が過ぎていく。

故郷に里帰りのような一泊二日の旅。1年の疲れも取れた。この執筆者の会を計画してくださった千葉さん、大谷さん、そして参加した皆さん、楽しく、ほっこりする時間をありがとう。



⑥団士郎

年末に地元琵琶湖の北、メタセコイヤ並木道を更に奥に入り込んだ、文化財のような古民家での合宿。私好みの馴染みのある時間な気もするが、いやいや、なかなかこういうまとまった時間が取れることないなあと思う時間でもあった。

暖かくした古い日本家屋のホームこたつに座って、何をするわけでもなく集まった9人でだべっている。そこに介入してくる、「説明が下手で・・・」というのが枕詞のオーナーの「白谷荘」の解説したがり具合がアクセント。ここは由緒正しい場らしく、皇室の誰ぞがやってきている写真もあるが、お忍び訪問なのでSNSとかでの拡散はご遠慮下さいとか。なんか分からないけど、いろいろ面白いフックがあちこちにある。

すぐ近所に温泉施設があって、みんな出かけたが、私は面倒なのと寒そうなので、こたつでだらだらだべっていた。こういう自由さはまことに結構なモノで、観光地でもないのどこかを見に行かねばならないノルマ感もない。

向かいの土蔵には古くからの教科書が保存されていたようで、その資料を整理に何とか大学が入っているとか。確かに私が子どもの頃、あるいはその前の教科書が大量に保存。昨年、東北で、津波被災で水没した個人の土蔵に保管されてきた資料、古文書をレスキューしている活動を見たが、こういう動きがあちこちにあるのだろう。ぶらつくところな出来事にいろいろ遭遇するのが面白いところだ。

何の話をしていたのかは、例によってまったく記憶にございません。ただただ楽しく時を過ごし、翌朝は朝食後、一息ついて現地拡散。2020年に第二回目があるかどうかは分かりませんが、あるとしたらやはりこの年末最終週末でしょうか？